

学位授与番号	医博甲第1103号
学位授与年月日	平成6年3月25日
氏名	川尻秀一
学位論文題目	実験的誘発舌癌における浸潤増殖像に関する検討

論文審査委員	主査 教授 山本悦秀
	副査 教授 中西功夫
	教授 中沼安二

内容の要旨および審査の結果の要旨

口腔扁平上皮癌の浸潤様式が患者の重要な予後因子であることについては、Yamamotoらにより一連の報告がなされてきた。一方、実験癌において発癌時にどのような浸潤様式を呈し、さらに腫瘍の増大につれてどう変化するかを検索することは臨床での腫瘍の増大・高浸潤化を推定する上で重要と考えられるがその観点からの研究は見当たらない。そこで本研究ではジメチルベンズアントラセン（DMBA）誘発ハムスター舌癌69匹を用い、これらの点について検討した。発癌操作は右舌側縁を週3回歯科用クレンザーで擦過し、DMBAアセトン溶液の塗布を12-24週行った。得られた結果は以下のように要約される。

1. 発癌処置12週以後、全例に扁平上皮癌が認められた。
2. 腫瘍死直前まで塗布した28匹の肉眼的発育様式は外向型21匹、内向型7匹、また病理組織像から判定了腫瘍の浸潤様式は、浸潤傾向の弱い1型から最も強い4型（これを4C型と4D型に細分類）まで各々4, 7, 9, 8および0匹であり、これら肉眼的発育様式と浸潤様式との間には内向的ほど浸潤傾向が強いという相関性が認められた。
3. 塗布12週で発癌後、刺激を続けた群と中止した群で浸潤様式を比較した41匹では、前者において浸潤様式1, 2型から3型へと高浸潤化する傾向にあった。
4. 発癌後から死亡直前までの期間と浸潤様式との関係を見ると、癌の増大と共に高浸潤性となる傾向にあり、特に4C型は15週以後に初めて観察された。
5. 癌巣周囲基底膜の保存状態をIV型コラーゲンとラミニンの免疫組織染色で観察し、連続群、不連続群および広範囲消失群に分類したところ、各々16匹（39%）、15匹（37%）および10匹（24%）であり、広範囲消失群は浸潤の強い4C型に見られる傾向にあった。
6. Proliferating cell nuclear antigen (PCNA) による免疫染色法にて、69匹全例の各浸潤様式別の陽性率を算定したところ、1型：13.5%、2型：15.6%、3型：18.8%および4C型：26.6%と浸潤傾向が強くなるにつれ、高値となる傾向にあった。

以上、本研究は実験舌癌での発癌時の浸潤様式さらに腫瘍の増大につれての変化を明らかにし、臨床での舌扁平上皮癌の進展と浸潤様式との関連を示唆した点で口腔癌治療上、価値ある労作と評価された。